

教養科目における絵本の活用とその効果に関する研究

— 教養科目における実践を中心に —

Research on the Use and Effects of Picture Books in Liberal Arts Subjects

— Focusing on Practice in Liberal Arts Subjects —

八幡 真由美 YAHATA Mayumi 林 浩子 HAYASHI Hiroko

本研究では、大学における教養科目の位置づけについて、大学審議会及び中央教育審議会の答申の変遷を整理するとともに、筆者らの講義での実践をもとに教養科目における絵本使用について考察を行い、教養科目における絵本使用の有効性について明らかにすることを目的とした。教養科目における絵本の効果として、①人間性の涵養や卒業後の自分の生き方を考える始まりの場となること、②社会問題に興味や関心を持ち、社会参加を考える場となること、③キャリア構想という3点が挙げられる。この3点は現在、教養科目に求められている学士力の養成に当てはまるといえる。また、教員が学生たちを把握し、学生に適した工夫を実施することが必要であり、その結果、学修者本位の教育が図られ、将来学び続けることができる人材育成へと繋がるといえる。リフレクシオンカードの活用等、学生が受けたいと思う内容を吟味するとともに、授業方法を工夫することが重要である。

キーワード：教養科目、絵本、学習者本位の教育、学士力、人間性の涵養

1. 問題の所在と目的

大学には教養科目と専門科目があり、学生はそれぞれの専攻に応じて専門科目を履修するとともに、全学生が教養科目を履修する。教養科目は卒業のための必修科目であり、大学の教育課程の中では重要視されている。しかし、学生は専門科目や実技に関しては積極的に取り組む姿が見られるが、教養科目に関しては「卒業に必要な単位取得のため」の履修であるという意識や消極的な側面があることは否めない。

2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（2018）では、高等教育が目指すべき姿として、『何を教えたか』から、『何を学び、身に付けることができたのか』への転換の必要性を挙げ、「単に個々の教員が教えたい内容ではなく、学修者自らが学んで身に付けたことを社会に対し説明し納得が得られる体系的な内容」となるよう構成することが求めている。また、多様な学生が在籍する中では多様で柔軟な教育プログラムが求められる。同時に、教育の質の保証も必要となる。教養科目においても教員が教えたい内容ではなく、学生が自ら学びたい内容を見定め、授業を展開していくことが重要となる。学生に教養科目に対する興味や関心について調査を実施した結果、最も興味深い理由として「自分」が「興味」ある「分野」や「内容」について「知る」「学ぶ」「考える」こと、自分の生活、身の回りの関連する事柄を学問的に学んだこと及び学問と関連付けて知識が得られたこととしている。このことから、学生は自分の生活や身近なことに関連したことに對し、「学問」として学ぶことが重要視している（堀之内、2017a）。

しかしながら、大人数が受講する教養科目においては受講者全員が自ら学びたい内容を設定することが難しいことも考えられる。受講者にとって興味や関心が薄い内容の講義をどう充実させるかも教員は検討していかなくてはならない。筆者らは学生が興味を持てる講義とするために講義内容の工夫の一つに絵本を教材として活用することで学生の興味や関心を促すことができるのではないかと考えた。

絵本は子どものものと捉えられがちだが、近年、大人にとっての絵本の魅力が注目されている。絵と文章によって想像力を膨らませ物語の世界を楽しむ絵本は、読み手の心を癒やしたり思考を柔軟にしたりするセラピー

効果もある。また、子どもの頃に出会った絵本に大人になって再会すると、その解釈や味わいに変化することも多い。子どもの頃には気づかなかった作者のメッセージを知るとともに、自身の成長を実感することができる。さらに、ページ数に制限があるがゆえに、精選された言葉と絵（写真も含む）で自然や社会の事象を端的に表す絵本は、子どもも大人も自ら知識を広げたり深めたりしていくきっかけになる。このように、大人になって絵本に触れることの意味は大きく、筆者が担当する教養科目の授業内で、絵本を教材として活用することにした。

本研究では、大学における教養科目の位置づけについて、大学審議会及び中央教育審議会の答申の変遷を整理するとともに、筆者らの講義での実践をもとに教養科目における絵本使用について考察を行い、教養科目における絵本使用の有効性について明らかにすることを目的とする。

2. 大学における教養科目に関連する大学審議会及び中央教育審議会答申の変遷

大学における教養科目について、中央教育審議会「大学分科会大学教育部会（第7回）[資料3-2] 学士課程教育に関するこれまでの大学審議会答申等の主な提言について」（2006）を基に、教養科目について大学審議会及び中央教育審議会の答申の整理を行う。

(1) 「大学教育の改善について」（答申）

1991年2月の大学審議会において、「一般教養の理念・目標は、学生に学問を通じ、広い知識を身に付けさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うこと」とし、さらに、「一般教育の理念・目標は、大学の教育が専門的な知識の修得だけにとどまることのないように、学生に学問を通じ、広い知識を身に付けさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うことにあり、入学してくる学生や諸科学の発展の現状から見て、このような理念・目標を実現することが一層必要」とし、教養科目において幅広い知識を身に付けさせることの重要性を示している。

(2) 「高等教育の一層の改善について」（答申）

1997年12月の大学審議会において、教養科目を高等教育全体の大きな柱と位置づけ、「教養教育によって学生にどのような知識あるいは能力を身に付けさせるのか、その目的を明確にすること」、「明確な目的意識と適切な方法による教養教育を実施すること」とし、教養教育の目的の明確化と適切な方法を用いた実施の必要性を示している。また、「多くの大学等で、いわゆる教養教育と専門教育との有機的な連携に配慮した一貫教育に向け、カリキュラム改革が進められている。しかしながら、その過程で、教養教育が軽視されているのではないかとの危惧があるほか、教養教育を行う目的が不明確なまま、単に専門教育の入門的な授業を行うことを教養教育と呼んでいるのではないかとの指摘もある」とし、教養教育の軽視を危惧するとともに、教養教育がその後の専門教育の入門教育とされている現状も危惧している。

(3) 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（答申）

1998年10月の大学審議会において、大学について「高等教育の中核的機関として、社会の各分野で活躍できる優れた人材の養成・確保」の役割を果たすことが期待されていることを示している。また、今後の高等教育においては「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探索能力）の育成、「自主性と自己責任意識、国際化・情報化社会で活躍できる外国語能力・情報処理能力や深い異文化理解」、「高い倫理観、自己を理性的に制御する力、他人を思いやる心や社会貢献の精神、豊かな人間性などの能力・態度のかん養」の育成の重要性を示し、単に知識の育成だけでなく、自主性や自己責任、人間性等の内面の成長も必要としている。

(4) 「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」(答申)

2000年12月の大学審議会において、「米国におけるリベラルアーツ・カレッジのような教養教育を中心とした幅広い教育プログラムを持つ学部」への改組転換を促している。また、「学部段階において、広い視野を持った人材の育成を目指す教養教育を中心とした教育プログラムの提供」を推進し、教養教育の重要性を示している。

(5) 「新しい時代における教養教育の在り方について」(答申)

2002年2月の中央教育審議会において、教養教育の実施に当たり、大学間の連携や協力の積極的な促進の有効性が挙げられている。また、「新しい時代を生きるための教養としては、社会とのかかわりの中で自己を位置付け律していく力や、自ら社会秩序を作り出していく力が不可欠」とし、「グローバル化や科学技術の進展など社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を与えるものであること」の重要性を示し、「人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養など、新しい時代に求められる教養教育の制度設計」の必要性を示した。

(6) 我が国の高等教育の将来像(答申)

2005年1月の中央教育審議会において、新たに構築されるべき教養教育は「学生に、国際化や科学技術の進展等社会の激しい変化に対応し得る統合された知の基盤を与えるものでなければならない」とし、従来のような縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や入門教育ではなく、「専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法等の知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養に努めること」を示している。

(7) 学士課程の構築に向けて(答申)

2008年3月の中央教育審議会において、「国として、学士課程で育成する21世紀型市民の内容に関する参考指針を示すことにより、各大学における学位授与の方針等の策定や分野別の質保証枠組みづくりを促進・支援する」とし、各専攻分野を通じて培う学士力として「1. 知識・理解文化(社会、自然等)、2. 汎用的技能(コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力等)、3. 態度・志向性(自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等)、4. 総合的な学習経験と創造的思考力」を挙げている。これらは教養教育としての記述ではないが、大学教育の根幹でもある教養教育も学士力養成に向け、その内容を吟味していく必要があると考える。

3. 国立音楽大学の教養科目

本学の教養科目は「人間の探究」、「文化の探究」、「社会の探究」、「身体の探究」という4つの探究の世界をもとに、13の「学びの領域」を設定し、4年間にわたって幅広い知識と深い理解を修得する。4つの探究の世界から最低2単位ずつ、計20単位以上履修することが卒業要件である。

「人間の探究」には、心の仕組みA・B、人間と行動A・B、人間と環境A・B、人間と文化A・B、哲学A・B、美学入門、論理学入門、現代哲学入門、文学A・B・C・Dの計17科目が設定されている。「文化の探究」には、ヨーロッパの歴史A・B、日本の歴史A・B、世界の歴史A・B、宗教入門A・B、西洋宗教史A・B、宗教と芸術A・B、日本語文章術A・B、教育メディア論、音楽データサイエンス入門、美術の歴史A・B、絵画の歴史A・B、現代芸術の世界A・B、建築の世界A・B、演劇の世界A・B、メディア・アートの世界、音の科学A・B、声の科学A・B、楽器の科学A・B、音楽の科学A・Bの計35科目が設定されている。「社会の探究」には、日本国憲法、音楽著作権入門、音楽の仕事(音楽産業論)、日本の社会と経済、文化経済学入門、世界の金融と経済A・B、お金とくらし(生涯生活設計)、社会と福祉A・B、子どもの発達と心理、青年の発達と心理、老年期の発達

と心理、生涯学習、仕事とキャリア（キャリア発達）、就職・結婚・子育ての計16科目が設定されている。「身体
の探究」には、身体健康 A・B、医療と健康 A・B、病気と健康 A・B、音楽家のための心身論 A・B、スポー
ツ A・B・C・D・E の計13科目が設定されている。総計81科目が開かれており、さまざまな分野の学びの機会が
提供され、学生の興味や関心に応じた科目選択を可能としている。

学生便覧には「今日の複雑化する社会の中で音楽人として、また社会人として音楽文化を担っていくには、広
い視野の中で、自分が専門的に学ぶものの意味を理解していかなければならない。その意味で様々な種類の教養
科目を学ぶことが重要である」とし、学生は専門分野に限らず幅広い教養を身につけることが重要であり、その
ために大学では様々な科目を用意し、学生の興味や関心に沿った講義を選択できるようにしている。科目の中
には、教職や学芸員等の様々な資格のために必要な科目やコース科目として必修または推奨科目もあるが、できる
限り種類の異なる科目を履修することが推奨されている。

筆者らは「就職・結婚・子育て」（2016年度～現在に至る）及び、「人間と環境 A・B」（2019年度・2021年度
～現在に至る）「社会と福祉 A・B」（2019年度～現在に至る）を担当しているが、担当科目において、筆者らの
専門領域である「子ども」や「子育て」の視点から学びを深めることを意識した授業実践を行っている。なぜな
ら、人は皆子ども時代があり、子育ての対象として養育され、成長してきた。多くの学生は、大学卒業後は社会
人となり自立していく。高等教育の場において、誕生からこれまでの自分自身の成長や関わりを振り返り、その
意味を考える時や場を持つことは、「2. 大学における教養科目に関連する大学審議会及び中央教育審議会答申
の変遷」で示された、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察を得て、人間性の涵養や卒業後の豊かな人
生に繋がっていくと考えたからである。

4. 各科目における実践

(1) 「就職・結婚・子育て」

本講義は「多くの学生の大学卒業後の進路である就職や、個々の人生設計選択の一つである結婚し家庭を持
ち子どもを育てることの意義や意味を考える。そのために、誕生から乳幼児期の子どもの心身の発達や生活に
ついて理解を深め、子どもの健やかな成長に必要な知識と対応について学ぶことを通して、自分自身の育ちや
成長、関わりを振り返り、育てられてきた者から育てる者へと意識を変容させながら今後の人生を考えていく。」
ことを目標とする。

授業では、授業の始まりに履修学生に向けて絵本を紹介する。意識的に、子どもたちに長年読み継がれてきた
絵本と社会の変化に伴う新たなテーマや視点で刊行された絵本を選書し、読み聞かせを行っている。長年読み継
がれてきた絵本には履修学生が幼い頃に出会っている確率が高く、絵本を介して幼い頃の記憶をたどりながら自
身の成長や変容、関わりを知ることができるからである。

本稿では、筆者が「就職・結婚・子育て」の授業担当を始めた2016年から何度も紹介してきた以下の2冊を取
り上げる。2021年と2022年度の履修学生の、読み聞かせ後の口頭による感想と Google Classroom に投稿された
文章を抜粋して記す。

①『ぐりとぐら』

1963年に福音館から刊行された『ぐりとぐら』（中川李枝子作、大村百合子絵）は、野ねずみのぐりとぐらが
森に出かけ見つけた卵でカステラを作ると、森中の動物たちが集まって来て皆でカステラを食べるというシン
ブルなストーリーである。リズムカルな言葉と鮮やかな色彩で描かれた絵は、刊行から60年を経た今でも子ども
たちに愛され、現在子育て中の親世代も子ども時代に読んだ経験を持つ絵本である。

〈履修学生の反応〉

・子どもの頃に大好きだった絵本を、久々に読んでもらって懐かしかった！……不思議なことに、ストーリーよ

りも、いつも母親に抱っこされ読んでもらった部屋や時間を思い出した。

- ・小さい頃、絵本と同じカステラが食べたいと親にねだったら、ホットケーキを作ってくれたことを思い出した。今考えると、自分は大事にされていたのだなあと思う。
- ・(絵本を見ながら)カステラが焼けるのをワクワクしながら待ったり、(絵本のように)卵が落ちていないかなあと公園を探したりしたことを思い出した。それは自分にとって本当に楽しい時間だった。子どもにとって絵本は大事なものののだなあ…自分も先生や親になったとき、子どもに沢山絵本を読んであげたい。
- ・自分が幼い頃読んだ絵本を成長して読むと、作者のメッセージや絵の面白さなど絵本の持つ力に改めて気づかされた。
- ・森中の皆でカステラを食べることの中に、作者の平和への願いが込められていることを知り、絵本は奥深いものだと感じかされた。自宅に残されている絵本をもう一度じっくり読んでみようと思った。

②『ラブ・ユー・フォーエバー』

1997年に岩崎書店から刊行された『ラブ・ユー・フォーエバー』(ロバート・マンチ作、乃木りか訳、梅田俊作絵)は、やんちゃな幼年期から少年期、思春期、そして青年期と、成長する息子へ一貫して注ぎ続ける母親の愛情と絆が描かれた大人向けの人気の絵本である。幼い頃にこの絵本を読んだことがある履修学生はいなかった。(履修学生の反応)

- ・子どもを育てることは、本当に大変なことなのだと感じた。自分が将来、こんなにも根気強く愛情を注ぎ続けることができるのか、自分にはまだ自信がない。
- ・幼年期、少年期の場面を(自分が)親目線で見ていたのに、思春期、青年期の場面は(自分が)子ども目線になった。自分も思春期の頃は親を鬱陶しく感じ反抗ばかりしていたが、親はこういう気持ちだったのかと親に詫びたくなった。
- ・本を読んだ後(離れて暮らす)親の声が無性に聞きたくなった。今夜、電話をかけたい。
- ・物語の最後は、主人公が自分の子どもを抱いている場面を見て涙が出た。こうやって、命って繋がれていくのだと感動を覚えた。
- ・授業の中で、先生が話す「育てられる者から育てる者へ」という意味が、絵本を通して少しだけわかったような気がする。

③考察

①の履修学生の反応から見てきたのは、幼い頃に読んだ絵本を、自身の成長に伴い異なる視点で読んだり、味わったりする中で、履修学生が絵本の意味に気づいていたことである。さらに、成長して幼い頃の絵本に関する記憶を呼び覚ましたとき、絵本の面白さとともに、自分に絵本を読んでもらった人との関わりを振り返り懐かしむ様子が見られた。これは、絵本が単に知識や想像性を育むモノロークの世界でなく、人とのつながりや関わりを生み出すダイアロークの世界を持つことがわかった。それは、絵本を読んでもらった人=(ここでは主に)親とのつながりや関わりが思い出として残っていることがわかった。

②の履修学生の反応から見てきたのは、幼年期、少年期、思春期から青年期へと成長していく絵本の中の主人公と自分を重ね合わせ、育てられる者としての視点と育てる者の両方の視点で絵本を味わっていることである。これは、筆者が以前この絵本を高校生に向けて読んだときとは異なる反応だったことから、大学生は育てられる者から育てる者へと少しずつ意識の変換が始まっていく時期であるとも考えられる。育てるとは、子育てだけでなく、教職課程を学ぶ学生も同様である。多くの履修学生がこの絵本を読んだ後、親への詫びや感謝を示した。さらに、上記に挙げた「命が繋がれていくのだと感動を覚えた」という履修学生の言葉からは、子育ての意味や意義を感じていることも伺える。

一方で、学生の反応の中には、自身が幼い頃に温かな親子の関わりやつながりを持ってなかったり、虐待を受け

たりしたことの辛さや怒りを吐露する学生も少なからずいる。彼等の心の傷は簡単に癒えるものではないが、絵本との出会いが心の奥に隠していた悲しみや怒りを吐き出し、自分に向き合っていくきっかけになっていく第一歩となる学生もいる。これは、後に記す、現代の社会問題になっている子育て環境や家族をめぐる現状と課題へと繋がっていく。

教職教養である本講義において絵本を活用することは、履修学生が自分自身の成長を振り返り、人間としての在り方や生き方に向き合うきっかけとなり、人間性の涵養や卒業後の自分の生き方を考える始まりの場になっていくことがわかった。社会の変化に伴う新たなテーマや視点で刊行された絵本については、後述に委ねる。

(2) 「社会と福祉 A」

本講義は「社会と福祉、特に子ども家庭福祉について、少子化、子どもの家庭生活における変化、虐待問題、経済的な問題、子育て環境や家族をめぐる現状と課題について理解し、その支援について学ぶ。」ことを目標としている。本講義では、子ども虐待及びDV、子どもの貧困、ひとり親家庭の講義の際に絵本を活用した。絵本を活用した理由として、これらのテーマは本学学生の家庭や生育環境ではあまり縁のないことであり、テキストを用いた説明やパワーポイントの資料では表面的には理解できても理解を深めることは難しいと考えたからである。

本稿では、2022年度に読み聞かせを行った絵本及び履修学生のリフレクションカードの感想を抜粋して記す。

①子どもの虐待について

2003年にクレヨンハウスから刊行された『わかってほしい』(MOMO 作、YUKO 絵)は虐待の当事者である作者が親に虐待される子どもの気持ちを表現した絵本である。真っ赤な背景に描かれたクマはページをめくるとに壊れていき、気持ちが白と黒で表されている。虐待され、悲しい、淋しい気持ちを抱いていながらも、親に「愛されたい」と願う子どもの気持ちがあふれている。

2009年に瑞雲社から刊行された『まねっこでいいから』(内田麟太郎作・味戸ケイコ絵)は作者である内田氏に寄せられた幼児虐待を受けどうしても子どもを抱くことができない母親からの1通のメールから誕生した絵本である。「ママ、まねっこでいいからだっこして」と子どもが提案し、まねっこの抱っこであっても抱っこされた子どもは嬉しい、子どもを抱きしめることの大切さを教えてくれる絵本である。

2019年に復刊ドットコムより復刊された『あなたはちっともわるくない』(安藤由紀作)は児童虐待をテーマにした絵本である。両親に虐待を受けているちびくまが、友だちや医師に支えられ、立ち直っていく物語である。

2021年にかもがわ出版から刊行された『パンツのなかのまほう』(中川紗矢子作、でぐちかすみ絵)は子どもを性被害から守ること、被害にあった場合はどうしたらよいのかを具体的に伝えている。「性暴力」「性被害」という触れにくい問題を明るい色調とかわいらしい絵で描き、小さい子どもが手に取りやすい工夫がなされている。

< 学生の感想 >

- ・『まねっこでいいから』は涙を誘うような内容で少し悲しくなった。幸せに暮らせている子どもだけではないということ、常に頭の片隅に置いておきたいと思う。
- ・『わかってほしい』の中で、最初は白い文字だけだった言葉がだんだんと大きな黒い文字になっていくところが印象的だった。
- ・ちびくまくんのお話を読み返したいと思った。何かできなくても話を聞いてあげるだけでよいことに気づいた。
- ・絵本は子どもの心の寂しさが伝わってきて、虐待や育児放棄されている子どもたちを助けてあげたくなった。
- ・絵本を読んで「自分が悪い子だから」と思ってしまう子どもがいなくなる平和な世の中になってほしいと思った。まだ、具体的にできることや解決策はわからないが、これから少しずつ知っていきたい。

- ・周りの人にはわからない素直な気持ちが込められていて、世の中の虐待をしている親たちに読んでほしいと思った。
- ・絵本は言葉が多くないし、難しくはないけれど、子どもの心情がわかりやすいからこそ、ダイレクトに伝わってきて、すごく心にしみた。
- ・実際に絵本を見て聞いて、自分が親になったとき、大切に、愛情をたくさん込めて育てて過ごしたいと思った。
- ・虐待というセンシティブな内容も絵本を通して触れるというのは、子どもも大人にとっても伝わりやすくとてもよいと思った。
- ・言葉で説明することが難しいことでも絵本を使えば伝えやすいので、積極的に活用していきたい。

②子どもの貧困について

2020年に合同出版から刊行された『きょうはおかねがないひ』（ケイト・ミルナー作、こでらあつこ訳）は母親が一生懸命働いているが金銭的に貧困であるひとり親家庭の親子はお金がかからない楽しいことをたくさん知っていて、毎日を明るく生き抜いている。フードバンク等の知識を得ることもできる。

2020年に井上出版企画から刊行された『こどものなみだ—こども食堂便り—』（山川貢・文、山花美游・絵）は実際にこども食堂に通う子どもたちの事例14例を絵と文で表現している。貧困にある子どもたちはどのように感じているのか、リアルな声が伝わる内容である。

< 学生の感想 >

- ・貧困は知っているけれど、ご飯を食べられない、必要な物が買えないことがあることにびっくりした。
- ・こども食堂の絵本で、3日もごはんを食べていない、クラブに入りたいのにお金がないなど、お家の経済的理由のせいで、子どもたちの行動が抑制されている状況に驚いた。
- ・子どもの貧困について、色や挿絵がある絵本によってよりわかりやすく知ることができた。
- ・貧困についてよくわからなかったけれど、想像より悪い状況だった。こども食堂がもっと広がるといいなと思った。
- ・絵本を通して、小さい子にも世界の問題を簡単に知らせることができるのはとてもよいと思った。
- ・私のまわりにはそういう状況がないので、想像しただけで胸が痛くなった。
- ・自分は本当に恵まれた環境で育ってきたということを確認させられる。親に感謝したい。

③考察

①の履修学生の感想から、虐待について言葉は知っているが中身はよく知らないという学生が多い中で、絵本を通して虐待について知り、感じ、考える中で、虐待を身近な問題として捉えることができたことが伺えた。虐待について理解を深めただけでなく、虐待を受けている子どもに自分は何ができるのかを考え、周りが支えていくことの重要性に気づくことができた。これは、絵本はテキストや資料に比べて視覚からの情報が多いことに加え、わかりやすい言葉で書かれていることにより、学生のテーマに対する理解が進んだと考えられる。

また、虐待は言葉では残酷な側面もあり、言葉では伝えにくい内容や難しい内容もある。特に、性虐待については説明が難しいこと、言葉だけでは伝わらないこと、詳細な説明を行うことで学生に嫌悪感を抱かせる可能性もある。その際に性被害をテーマにした絵本『パンツのなかのまほう』を活用することにより、デリケートな問題をわかりやすく伝えることができた。教師を目指す学生たちのリフレクションカードには「自分が教師になった際、こうした絵本を活用し、子どもたちに伝えていきたい」、「言葉で説明することが難しいことでも絵本を使えば伝えやすいので、積極的に活用していきたい」等、自分が理解しただけでなく、教師になった際の活用やその活用方法についての意見もあり、教師としての意識を深めることもできたと思われる。

②の履修学生の感想から、自分たちのまわりには貧困状況が少ない中で、貧困とはどういうことか理解を深め

ることができたことが伺える。こども食堂やフードバンクが貧困家庭にとって重要な位置を占めていることに気づくとともに、自分にできることは何かを考えることもできた。また、自分自身の恵まれている状況を再認識し、大学に進学することは当たり前ではないこと、好きなことができることの素晴らしさや保護者へ感謝を改めて感じたという面も見られた。

教職教養である本講義において絵本を活用することは、履修学生が身近なことではないと感じていた虐待や貧困を身近な問題だと捉え、社会問題への興味や関心を抱ききっかけになっていることがわかった。また、自分自身は何ができるのか、社会参加を考えるスタートとなったことも推測できる。

5. 総合考察

上記のことから、授業に絵本を活用することにより、学生自身が絵本の持つ意味に気づくとともに、授業への興味や関心を引き出し、内容の理解が進んだことが明らかになった。また、学生が自分自身の成長を振り返り、人間としての在り方や生き方に向き合うきっかけとなり、人間性の涵養や卒業後の自分の生き方を考える始まりの場になっていくことも明らかになった。学生自身が社会問題を身近な問題として捉え、自分は何ができるのか、社会参加を考える場となったことも推測できる。加えて、将来、教師になった際の活用方法を考える学生も見られた。これらのことから、教養科目における絵本の効果として、①人間性の涵養や卒業後の自分の生き方を考える始まりの場となること、②社会問題に興味や関心を持ち、社会参加を考える場となること、③キャリア構想という3点が挙げられる。この3点は現在、教養科目に求められている学士力の養成に当てはまるといえる。

しかし、教養科目における工夫は絵本のみが有効であるということではない。絵本以外にも学生の興味や関心を引く工夫や手段は多く存在する。三ツ谷(2018)は毎回1冊の書籍を通して歴史と文化を学ぶ授業形式について、新しい知識を身に付けたとする学生が多かったことを報告している。樋口・田中(2018)は「やる気度チェックシート」の利用と「座席指定」を実施することが教育目標達成に効果的であることを示唆している。片岡(2020)は教養科目の動機づけとして、アクティブラーニングの視点を取り入れた講義を実施することによる学生の学習に対する動機づけを高める上での有効性を示している。中山・林田(2020)はメタ認知能力育成を目標とした教材を開発し、その教材を活用することによる学生のメタ認知力の向上を明らかにしている。これらは教員が工夫を行うことで学生の興味や関心を高めることに加え、教育効果が得られることを示しているといえる。また、菊田(2023)は専門職業人の自身の体験を交えた講義を実施した結果、「失敗を恐れずに挑戦する前向きな生きかた」、「他者とのかかわりの中で生きる、ご縁の大切さ」、「さまざまな価値観を受け止める広い視野」、「これだと決めつけずに、ありのままにとらえる素直なものの観かた」、「生きかたへのこだわり、一貫性が、人をかたちづくる」、「教養は自分の人生に活かせるもの」などの学びや気づきを学生が得ていることを示している。上田(2023)は実務家による出前授業を実施したことによる学生の関心の高まりや消費者としての自覚が認められたとしている。これらのことより、教員自身が工夫することに加え、外部の専門家による講義を行うことでの効果も明らかにされている。加えて、齋藤(2018)は学生自身が作成した自作教材を活用した授業を実施することで、熱心な取り組み及び知識を生かし意欲的に困難を乗り越えようとする姿勢が見られたことを示している。教員の授業に対する工夫ではあるが、学生自身が行うことの効果も示されている。このように教養科目における教員の工夫はさまざまあり、どれも有効であるといえる。2022年に日本経済団体連合会が実施したアンケート調査では、採用の観点から大卒者に特に期待する資質として、回答企業の8割が「主体性」「チームワーク・リーダーシップ・協調性」を挙げるとともに、4割近い企業が「学び続ける力」を挙げている。特に期待する知識として、約85%の企業が「文系・理系の枠を超えた知識・教養」を挙げ、リベラル・アーツ教育や文理融合教育を重視した教育の実践を重要視している(中央教育審議会、2023)。これらの点からも学び続ける力が求められており、教養養育において学び続ける力を育むことが重要である。教養科目において、教員が学生たちを把握し、学生に適した

工夫を実施することが必要となる。そうすることにより、学修者本位の教育が図られ、将来学び続けることができる人材育成へと繋がるといえよう。

また、コロナ禍にあり、多くの大学において遠隔授業が実施された。杉森（2022）はコロナ禍における遠隔授業において、ZoomやYouTube、Google FormsやMoodleを利用した受講生の予備知識の把握や受講生の意見収集、Moodleによる受講生の学習の進捗状況の把握等を利用し有効性を明らかにするとともに、これらは対面授業を含めて有効な新しい手法であり、大学教育に用いることのできる手段であるとしている。また、岩崎（2021）はコロナ禍における教養科目の遠隔授業について、文系科目では教養科目の遠隔授業の実施は可能であるが、課題として「やる気」と「集中力」を挙げている。パンデミックが訪れた際の教養科目の在り方について普段から考え、遠隔授業だけでなく大学教育への接続を考えることも求められる。加えて、遠隔授業における魅力ある講義内容の吟味も必須である。

久川（2017）は大学教育において学問の分野を超えた授業研究の成果の共有が求められているとし、教員が自身で授業研究をし、それを共有し、議論を可能にすることの意義について述べている。奴田原（2019）は教養科目におけるコメント回収について大学授業におけるPDCAサイクルの運用に役立つことから、その重要性を示している。これらのことから、大学教員はリフレクションカード等を活用し、学生のニーズを把握し、そのニーズに応える内容を提供すること、教員間で各自の授業内容を共有し、お互いによりよい授業となるよう努力することが求められている。教養科目においてもリフレクションカードを活用し、学生が受けたいと思う内容を吟味するとともに、授業方法を工夫することが重要である。

6. 研究の限界と今後の課題

今後の課題として、今回は学生にアンケート調査を実施することができなかったため、学生にアンケート調査を実施し、授業実践に活かしていきたい。また、絵本以外の児童文化財を活用することが少なかったため、絵本以外の児童文化財の活用を行っていきたい。これらを通して、魅力ある教養科目の授業を行っていきけるよう努力していきたい。

付記

本研究は、2022年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けて実施されたものである。

引用文献

- 安藤由紀（2019）『あなたはちっともわるくない』、復刊ドットコム。
- 岩崎真梨子・横澤真理子・林雁青（2021）「工業大学における教養科目の遠隔授業—文系の科目をどう学ぶか—」、八戸工業大学紀要, 40, 118-127.
- 上田理恵子（2023）「法学教養科目における実務家との連携：消費者教育と「ルールづくり」の実践より」、富山大学教養教育院紀要, 4, 84-99.
- 内田麟太郎（2009）『まねっこでいいから』、瑞雲舎。
- 片岡祥（2020）「二年制保育職養成課程における教養科目の動機づけを高める講義実践—アクティブラーニングの視点を手掛かりに一」、紀要, 22, 93-102.
- 菊田文夫（2023）「「総合科目（教養の扉をひらく）」における学びの効果：専門性に立つ教養人の育成を目指して」、聖路加国際大学紀要, 9, 156-160.
- ケイト・ミルナー（2020）『きょうはおかねがないひ』、合同出版。
- 齋藤常男（2018）「自作教材を活用した指導の工夫—教職教養科目「理科指導法2」の実践を通して」、東京理科大学教職

- 教育研究, 3, 149-159.
- 杉森保 (2022) 「教養科目の講義におけるオンラインツール活用の事例」, 富山大学教養教育院紀要, 3, 51-56.
- 中央教育審議会 (2006) 「大学分科会大学教育部会 (第7回) 議事録・配布資料 [資料3-2] 学士課程教育に関するこれまでの大学審議会答申等の主な提言について1 大学が養成する人材像, 教育内容 (教養教育等) の在り方①総論」 <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/gijiroku/06101201/002/001.htm> (最終閲覧日: 2023年9月8日).
- 中央教育審議会 (2008) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」 <https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf> (最終閲覧日: 2023年9月8日).
- 中央教育審議会 (2018) 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申)」 <https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf> (最終閲覧日: 2023年9月1日).
- 中央教育審議会 (2023) 「大学分科会 (第171回) 会議資料【参考資料1】 参考資料集 今後の大学教育の振興方策について 参考資料集 令和5年1月25日版」 <<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoo/content/000212170.pdf>> (最終閲覧日: 2023年9月8日).
- 中川紗矢子 (2021) 『パンツのなかのまほう』, かもがわ出版.
- 中川李枝子 (1967) 『ぐりとぐら』, 福音館書店.
- 中山芳一・林田圭 (2020) 「コロナ禍における コミュニケーション力向上のための授業教材開発 —非認知能力間の関係性を切り口にして—」, 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要, 5, 296-305.
- 奴田原論 (2019) 「学生のリアクションの効果的な収集と活用: 大学における授業の質向上のために」, 文学部紀要, 33 (1), 1-33.
- 樋口勝一・田中忠芳 (2018) 「やる気度チェックシートを利用した文科系大学一般教養物理授業の実践」, 日本物理学会講演概要集, 73.1 (0), 3227.
- 久川伸子 (2017) 「大学の教養科目として「共に学ぶ」「談話分析」の授業デザイン」, 人文自然科学論集, 140, 43-57.
- 堀之内敏恵 (2017a) 「教養科目に対する学生の興味・関心—質問紙調査の分析から—」, リベラル・アーツ, 12, 35-44.
- 三ツ谷三善 (2018) 「教養科目「歴史と文化」における一つの試み: 毎回一冊の書籍について学ぶ」, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 37, 99-109.
- MOMO (2003) 『わかってほしい』, クレヨンハウス.
- 山川貢 (2020) 『こどものなみだ—こども食堂便り—』, 井上出版企画.
- ロバート・マンチ (1997) 『ラブ・ユー・フォーエバー』, 岩崎書店.

参考文献

- 赤坂真人 (2021) 「大学における教養教育の意義」, 吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系), 31, 77-90.
- 石井徹 (2017) 「一般教養授業「心の世界」講義ノート1」, 社会文化論集: 島根大学法文学部紀要社会文化学科編, 13, 47-63.
- 鶴飼昌男 (2021) 「大学教育における歴史系教養科目の在り方について —歴史教育における高大接続」, 教育開発ジャーナル, 11, 123-138.
- 大田真彦 (2022) 「持続可能な開発のための教育 (ESD) におけるポリティカル・エコロジー論の視点の活用: 大学の教養科目を中心に」, 九州工業大学教養教育院紀要, 6, 1-16.
- 大矢芳彦 (2016) 「大学教養科目の大人教授業における学生の意識調査」, 名古屋外国語大学外国語学部紀要, 50, 253-263.
- 金谷麻理子・高木英樹 (2019) 「大学体育における意識的運動学習の教育的価値に関する一考察」, 大学体育スポーツ学研究, 16 (0), 3-12.

- 川木晴美・上野恭平・神谷真子（2021）「コロナ禍における一般教養科目講義での Web ツール活用の利点とその効果」, 朝日大学一般教育紀要, 45, 19-33.
- 金城芳秀（2019）「シンセサイザーの教育実践への活用（8. 教養科目 / 専門関連科目）」, 沖縄県立看護大学教育実践紀要, 6 (1), viii-viii.
- 工藤真由美（2020）「教養の文学を適切に授業展開するための方策Ⅱ —構成の理解から解釈変容へ」, 四條畷学園短期大学紀要, 53, 27-38.
- 高橋啓太（2016）「教養科目におけるプレゼンテーション授業の考察」, 九州共立大学研究紀要, 7 (1), 25-31.
- 高橋咲良・中野裕美子・水内豊和（2020）「障害理解をねらいとした教養科目講義を受講した大学生の知的障害者に対する意識変容」, とやま発達福祉学年報, 11, 11-17.
- 鶴崎健一（2019）「学びの場としての地域と学生の志向 —教養科目としての可能性—」, 大学教育論叢, 5, 89-100.
- 中野研也（2020）「教養科目としての音楽の授業についての一考察：授業に関するアンケート調査をもとに」, 仁愛大学研究紀要. 人間生活学部篇, 11, 59-65.
- 根本淳子・市川尚（2020）「自分の学びをデザインする力の向上を意図した授業デザインの試み」, 日本教育工学会論文誌, 43, 1-4.
- 羽田貴史（2016）「大学における教養教育の過去・現在・未来」, 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 2, 47-60.
- 久川伸子（2020）「大学の教養科目として日本語教育を学ぶ「共修日本語」の授業デザイン」, 東京経済大学人文自然科学論集, 146, 101-114.
- 福田博子（2010）「大学における教養教育についての考察」, 八重洲学園大学紀要, 6, 19-28.
- 堀之内敏恵（2017b）「「教養科目」改革3年目の検証—新カリキュラムの設計と学生の履修動向に着目して—」, リベラル・アーツ, 11, 29-42.
- 水野義之（2018）「現在社会学部公開講座 日本の大学に「教養」を取り戻そう～大学教養教育の現状と課題を考える」, 現代社会研究, 020, 89-104.
- 横塚純一（2019）「教養科目「社会」の挑戦, 言語と表現—研究論集—」, 19, 29-42.
- 吉田修久（2019）「一般教養としての「生物教育」に向けて」, 神奈川大学心理・教育研究論集, 46, 255-274.